

連載

ああ、猪猟泣き笑い

その15年を振り返り

川崎市

田宮 治

色んなことがありました…



7 ある猟期の出来事(1)

●「富士雄号」入舎

桜が開花し始めた平成16年4月3日。かねての念願であった名犬「富士雄号」が羽田空港に着いた。私が無理を言って、本誌でも馴染みの四国・徳島の長谷川犬舎(長谷川隆重さん)にお願ひしていた待望の種牡犬である。

この日は日曜日で学校も休みのため、孫と妻を連れ3人で迎えに行くことにした。空港で見た「富士雄号」は見るからに精悍で、古武士の風格を漂わせ堂々としていた。よく見ると、幾多のイノシシとの闘いで、体中が傷だらけだった。また、その傍らには「富士雄号」にも引けをとらない風貌で、若犬(1歳)「ゲン号」が居た。「ゲン号」は、将来の種牡と目されている。

「ゲン号」は、私の犬舎で生まれた子であるが、長谷川さんの所で1猟期みっちり訓練を受け、その猟芸もさることながら、体形も種牡に有望…とのお墨付きをいただいた子である。私のことなどすっかり忘れてようだが、キリッとした顔立ちと体形は一級品である。長谷川系の猟犬の特長は、他犬にも、また特に人間に対しても、

何の心配もいらぬ「使いやすさ」である。最近、猪犬による人畜への危害が報道される中、この犬種こそが今後求められる猟犬であり、安心して猟野に放すことができ、楽しい猟の立役者になるものと確信している。

「富士雄号」と「ゲン号」を前にして私は大いに喜び、信じられないほど舞い上がっていた。孫の言葉にも上の空であった。孫が「ジジ、恐いね」と言って、犬箱の金網越しに手を差し伸べると、2頭は目を細めている。さすがに、おとなしいものである。

空港からの帰路にある読売巨人軍の練習所があった多摩川の土手は桜が咲き始め、休日ということもあって、満開を待ちきれない人達が花見の宴を開いていた。犬舎に着いたのは昼頃だった。

この日のために、1カ月前から妻と2人、老体に鞭打ち苦勞して犬舎を増築したのである。「大切にすよ」という証に、2頭を新しい小屋に入れ、最高(?)のご馳走を与えると、長旅の疲れも見せずペロツとたいらげた。喉が渴いていたらしく、存分に水を飲み干すと、棲み慣れた場所のように落ち着いた様子だった。

「どうだ、いいだらう…」と妻に言うと、「どうしようもない人」とでも言いたげに笑っている。妻は、やはりここで生まれた「ゲン号」が可愛いらしく、「お帰り、ゲンちゃん…」と頭を撫でている。私は、早くも「ゲン号」が一軍に入ったときの戦力を想像し、来る猟期に思いを馳せ、一人ニヤニヤ笑っていた。そんな私を見て妻は、「パパ、嬉しいんだね」と言う。このときばかりは、私も「うん」と素直に頷いた。

●田宮犬舎の長谷川系

私は、かねがね「トンビがタカを産むことはない」と思っており、犬の血統についてもそれなりに大切にしてきたが、長谷川さんから「私と田宮さんは、猟法は同じようだが、犬の交配の仕方は異なる」と言われていた。

私のこれまで交配は、良い仕事をすると犬同士で、できれば欠点を埋め合うような交配をし、それなりに良い子ができるように作ったのだが、長谷川さんは、自分の犬舎犬同士の交配を望まれていたようである。その意図するところはよくわかっていたので、今度長谷川さんから犬を譲っていただくときは、是非とも「種牡」になる犬を…とお願いしていたのである。

長い年月、ご苦労されて固定したことを考えれば、長谷川さんの言われることは「もつとも」である。私の犬舎には「クマ号」「ラン号」「チヒロ号」と、長谷川犬舎から来た犬がいるが、同犬舎の血統の素晴らしさを実感している。この3頭以外でも、前年老齢で亡くなった「ナン号」の芸は際立っていた。長谷川さんの狩猟人生がそのまま注ぎ込まれたような、見

事な「止め芸」をする犬だった。

長谷川犬舎の血統は体が小さめで、見た目にはとても大猪を止めようには思えないが、その動きは実に機敏で、何と言つても「口」が速い。さらに、決してイノシシを逃げ道に乗せない速い足を持つ。加えて、その根性もひと味異なる。そして最大の長所は、犬同士のケンカや人畜に無害のことである。

「富士雄号」の入舎によって、私の犬舎も「サクラ咲く」で、長谷川系が完成する。長谷川さんには感謝感謝である。

●「おらが村」のクマ猟師の二代目達を迎えて

私は、いつもより念入りに身支度を整え、愛犬6頭とともに早朝の閑越道をひた走り、待ち合わせ場所には予定どおり6時に着いた。まだ新潟ナンバーの車は来ていない。犬箱の愛犬達の様子を見ながら、「何かあったのだろうか」と思っていると、30分遅れで3人が到着。元気な声をかけてきた。何事もなく、ほっと胸を撫で下ろす。

まずは、今日泊まる宿に行く。ここで、地元の案内人である松岡さんの指示で、すぐ近くの山を狩ることにした。松岡さんは笑いな



将来有望の「ゲン号」(当時1歳)

がら、「本番は明日ですから、今日は疲れない程度に軽くやりましょう」と言う。ご無沙汰していたので、松岡さんの笑顔が嬉しかった。少し風があるが天気は良好。「軽くやりましょう」と言われても、自然とやる気が高まる。松岡さんの説明では、「イノシシは必ず入っている」とのことだった。なるほど、放犬場所へ行くと、3〜4日前の掘り跡がいくつもあつた。私と大滝さんが狩り進むことになり、先に松岡さんが2人を連れてマチ場へ向かった。

40分後、その場所から放犬しての入山である。初めての山であるが、松岡さんに教えられたとおり、に小峰を登り、岸伝いに犬を掛け、



左：名種牡「富士雄号」、右：バリバリの猟芸「サクラ号」



右に増築して、「富士雄号」と「ゲン号」入舎

横の出峰を5つか6つ越えた先がマチである。私は「必ず獲るぞ」と心に決め、大滝さんには「犬が必ず止めるから、その鳴き声に寄り付いて撃ってください」と説明した。

また「今回、私は銃を持たずに勢子に徹するので、遠慮せずに撃ってください」と言うと、彼は「なぜ？」という顔をした。「私はいつでも撃てるので、気にせずどんどんやってください」と言うと、やっと嬉しそうに笑った。

実は最近、欲張って大きなタケノコを小さなスコップで踏み切ろうとしたとき、左足の土踏まずを

痛めてしまい、山に入れる状態ではなかったのであるが、ずっと以前から約束しており、皆が楽しみにしての遠い新潟からの出猟である。私事で、足が痛い素振りを見せるわけにはいかなかった。

特に、登りよりも下りのときに、痛くてブレーキが利かない状況なので、考えた末に重たい銃は持たずに勢子に徹する作戦をとったのである。痛みより、皆との大切な共猟を成功させたい気持ちでいっぱいだった。

私は、精一杯カラ元気を出し、明るい声で「放犬しましす。どうぞ!!」とマチへ無線を流した。そして、愛犬達の頭を1頭ずつ撫で、「頑張れよ」と放犬した。犬達は、目の前の小沢伝いに登り始めた。このとき私は、「これは大変なことになった」と思った。

犬は全犬、張り切りすぎて、掘り跡からすぐに「香り」に乗った。大滝さんは、そんなことに気づいていないようだが、それでもさすがにクマ猟師の二代目。先犬の「ブル号」と「クマ子」に遅れまいと、2頭に付いて小峰を目指して登っているが、その足の速いこと。あつと言う間に、私は離されてしまった。

しまった。この調子だと、「ブル号」と「クマ子」は、すぐにイノシシを出してしまう。そして、小峰から裏の沢に必ず落とすだろうが、そうなったら獲りようがない。松岡さんの指示どおりに、「峰伝いに追う」というのが私の今日の役割である。

そこで、すぐに「ブル号」と「クマ子」に続こうとする「クマ号」と「チヒロ」「ラン号」「セン」を無理に呼び寄せ、必死に峰伝いのルートを追うことにした。一方、大滝さんは、先犬の「ブル号」と「クマ子」を追って、ルートから外れてしまった。

本来なら、全犬をまとめて大滝さんの後を追うのが最良で、必ず「ブル号」と「クマ子」が鳴き出し、それに全犬が集まる。後は、単独猟のクライマックスで、がっちり止めたイノシシを撃ち獲るだけなのだが……。しかし今日は、放犬後10分もしない時点で、先犬は「イノシシ近し」と、香りに乗ってしまっている。それを追うことは、今の私にはできない。

それにしても、止めの「クマ号」と「ラン号」がここに居る。こうなれば、「ブル号」と「クマ子」の2頭で止めるであろうが、相手が

大物なら止めきれまい。困ったことだが仕方がない。この際、先犬の「ブル号」と「クマ子」は大滝さんに任せて、ただただ4頭を呼び戻しながら、マチのほうへと追うことにした。

この山は、下草が綺麗に手入れされて止めづらいようだが、ここにイノシシの跡が残っている。私は、この先でイノシシが寝ていることを願いながら、何とかこの4頭で追い出し、撃ち獲ってもらいたい。そんな思いで、松岡さんから聞いていた目標の大岩を目指した。

4頭の犬は、やつと落ち着いた様子で、「クマ号」を先犬として、いつものように狩り進んでいる。4頭では、イノシシが出て来ても止まされずに、マチに落とすかも知れない。などと、勝手に都合よく考えながら大岩の所まで来た。なるほど、この大岩は行く手を塞ぐように大峰にどっかと鎮座している。その大岩の周りを「クマ号」と「ラン号」がせわしなく回り、「居るぞ!」のサインを送る。この大岩から小峰を越えればマチのはずだ。「よし、起こすぞ」と、直感でそう思った。しかし、場所が最悪だ。前は切り立った岩場である。

横斜めに、聞いていた獣道がある。小枝につかまりながら、やっと小峰の上に立った。何と、その下に見えるのは10年ほどのヒノキの林で、カヤ藪である。これなら、追い落としの最高の場所である。そんなことを考えながら、「クマ号」と「ラン号」を呼び戻した。この下に3人がいる。イノシシの気配もある。

よしよし。めったにやらない呼び戻しで、4頭が私の足元に集まった。「さあ行くぞクマ、ラン。よし、行け」。改めて仕切り直しである。私の声に元気づけられたか、「クマ号」を先犬として「ラン号」と「チヒロ」が飛びように下に走った。1歳の「セン」は、何かもらえらるでも思ったのか、まだ足元に居る。

間もなく、「クマ号」の「ワン・ワン・ワン」という間を置いた独特の寝屋鳴きが聞こえてきた。「よし、止めたぞ。寝屋止めだ」と喜んで駆け出そうとしたが、ここで銃を持っていないことに気づいた。今日は条件が全く違うのだ。「今日は、あなたが撃つて」と頼りにしていた大滝さんは、「ブル号」と「クマ子」を追って行ったきり無線も届かない。

仕方がない。居ない者は当てにならない。ここは一番、銃さえておいていけば、ソロリソロリと近づき、狙い撃ちの絶好のチャンスであるが、さて困った。この3頭では、とても刺すことはできない。イノシシは、ヒノキの植えたてのカヤ藪でベテラン「クマ号」の術中にはまり、動けなくなっているのだ。「クマ号」は、「早く来い」とばかり、しきりに鳴いている。

私は猟刀を握り、ソロリソロリと近づくことにした。「セン」も飛び降りて行った。突然、3頭が吠え出した。絡み鳴きである。さらに近づくと、イノシシは飛び出したらしく、カヤを倒す凄まじい音と、3頭の追い鳴きが聞こえた。

●グループ猟の難しさ

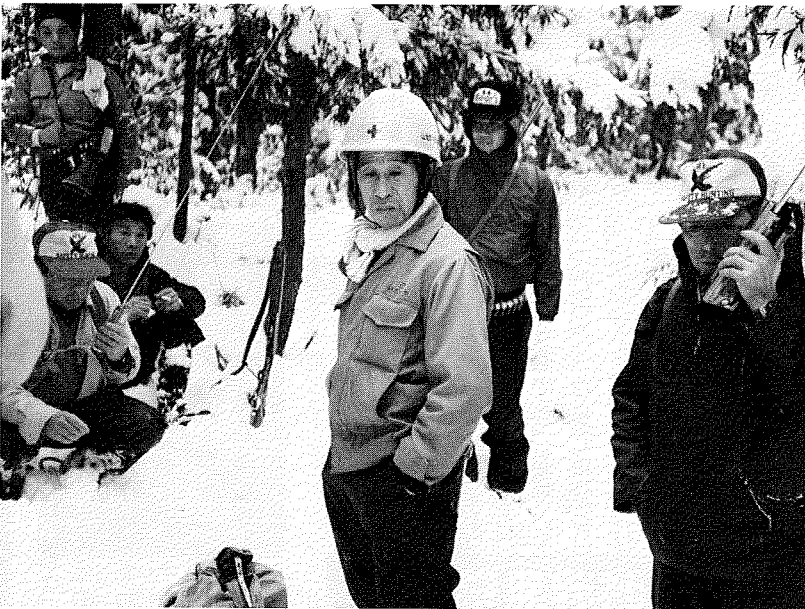
なぜかホツとしてわれに返り、無線で「出たぞ!! 行くぞ、頼むよ」と叫び、犬達の後をゆっくりに追った。よかった、これで責任は果たせた。上出来、上出来と、痛い足を引きずりながらカヤをかき分け、50mほど下った。カヤ藪は、あちこちに猪道がついていて、寝屋の跡もいくつもある。

いつもここに居るんだな...と思っていると、「セン」が何かに吠え

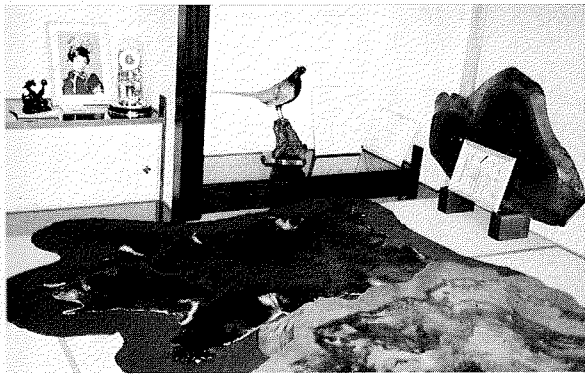
出した。「寝屋鳴きか？」と猟刀を頼りに、ソロリソロリと近づく。どうもイノシシのようだ。「セン」は、前にもそれらしい仕種をしたことがあるが、やはりイノシシに向かうようになったのだ...と思いつながら、さらに近づいた。

「セン」はまだ小さく、しかも1頭である。おまけにカヤ藪で見通しは最悪。銃を

持たない初めての接近は、気持ちの悪いものではない。藪に向かつて吠えている「セン」の姿は見えるが、その向こうは見えない。せめて上のほうから...と思いつ、回り込もうとしたときイノシシが飛び出した。その後を「セン」が下の沢までキャンキャン鳴きながら追って行った。やはり、「銃あつての猪猟」だということ肌



10年ほど前にクマ猟でお世話になったとき(新潟にて。中央が大滝さんの父上)



おらが国、新潟の「やまおやじ」

犬の止め鳴きが聞こえた。どうしたのだろうか？ この下には3人が居るはずなのに。私の所から見ると、一つの小さな出峰を越えた小沢辺りでガツチリ止めている。1時間が過ぎてても、鳴き声は全く動かない。マチからすぐの場所のはずだが、いったいどうしたのか？ 私は待ちきれずに無線を入れ、

「犬が止めきつて動かないので、鳴き声に寄り付いて落ち着いて撃つように」と告げた。しばらく経ったが、それでも銃声が聞こえない。私は、再度無線で「犬の鳴き声が聞こえますか？」と問いか

けた。「よく聞こえるが、どうも峰を越えた場所のようです」との返事だった。何ともじれつたい思いであった。銃を持つての単独猟なら、すぐに飛び降りて寄り付ける場所である。見れば、珍しいことに新戦力の「チヒロ」(2歳までがしつかり絡んでいる。イライラしながらも、今日は銃を持たずに勢子に徹すると決めたはずだ。ここは様子を見ていられるはなかつた。大きな切り株に腰を下ろして待つ。「セン」が戻って来たので、「よしよし」と頭を撫でて褒めてやると、私の傍らに座り込んだ。

「いくら待っても、銃声どころか寄り付く様子もない。何回も指示は送っているのだが、初めての山なのできちんと目標が指示できない。「小峰を越えた小沢辺り、小峰にマツの木が2本見える下だぞ」と、一生懸命知らせるのだが、うまく伝わっていないようだ。そして、とうとうイノシシが逃げにかかったようで、小峰の裏を上へ上へと、止まっては動き、止まってはまた動くといった様子で、先ほど下りて来た大岩に向かっていくようだ。大岩辺りを越えたと

声は聞こえなくなった。駄目か？。何でだ？ がっかりして重い腰を上げ、3人が待つている道に出ることを無線で知らせ、痛む足を引きずりながらカヤの藪を出て、田の畦に腰を下ろした。「セン」を繋いで皆を待つていると、3人が車でやって来た。「どこで止めていたの」と訊かれ、「あの辺りだよ。あのマツの木の下にある小沢の笹藪だよ」と指を差して教えた。

3人は、小峰を越えた裏側で待っていたようで、残念がった。犬の声は聞こえていたが、峰を越すことができなかつたという。言われてみれば「なるほど」となるが、このような場合は、単独猟でも車で動けるのだから、「鳴き止め」になつたらマチを離れ、車で移動して獲物を撃つ：こうした機転が必要である。車での移動なら30分とかからず駆けつけられたと思う。何時間も止めている犬であれば、十分撃ち獲れるはずであるが、慣れていないこともあり、それを言っても仕方なかつた。私にしても、山を知らないばかりに、「この辺りがマチだろう」と思って追い落としただけだが、ひと山手前に追つてい

たことになる。「また明日、明日寝りましょう」ということで、朝の放犬場所に戻ると、そこには全犬が帰っており、疲れた様子で大滝さんが待ちこがれていた。このとき私は、わが愛犬達でのグループは無理かも知れないと感じ、明日の猟が心配になつていた。大滝さんにしても、朝の放犬時に、私が「今日は、大滝さんが撃つてください」などと言わなかつたら、きっと私と一緒に追つていたはずだし、「寝屋撃ち」も「止め撃ち」もでき、楽勝のケースだったのだ。なまじ勇気づけたために、「ブル号」と「クマ子」を必死で追つたに違いない。「ブル号」と「クマ子」にしても、変な人(他人)がついて来ると思い、ますます離れたのだと思う。この2頭は、必ず止めるベテラン犬であるが、バックの中でもシャイな子達である。決して他人にはつかまらないし、気も許さない。それゆえ、大滝さんがどんなに頑張つても、撃ち獲れるどころか猟にならないはずだった。私は大滝さんの疲れた顔を見て、すまない気持ちになつた。それでも私は、一切を腹にしまつてカラ



後方左から：「ボス」「チヒロ」「クマ」「セン」、前列左から「ブル」「クルミ」

元氣を出し、「明日こそ獲れるよ、明日こそ」と言って皆を励まし、宿に向かった。
 犬が疲れない程度に軽くやる。これが今日の目標だったのだが。単独猟の勝負なら、うまくいけば30分で片がつくが、グループ猟ではそうもいかない。色々な問題も出てくる。それにしても、足を引

きずつての山越えは思いのほか疲れた。
 この夜は、松岡さんの心づくし猪鍋を囲み、おらが国新潟の名酒を酌み交わし、皆上機嫌だった。初めての顔合わせだったが、地元の吾妻猟師と、新潟は山熊田マタギの「クマ談議」は、大いに盛り上がり、私でも経験のない話も多かった。話のクライマックスは、クマ穴に入る場面の再現だった。身振り手振りを交えて笑わせる。懐中電灯で穴に入ったときの目の動きを実演して見せる。
 皆、大笑いであるが、実際には身の毛もよだつ場面なのだ。私が「嫌だ嫌だ、俺にはとてもできない」と言うと、二代目達は事もなげに「それは、一人前のクマ猟師になる証で、それができないようでは駄目さ」と言う。またまた大笑いである。
 明日が心配になるほど新潟の若者は酒を飲む。酒も強いし度胸もある。猟野に立てば、足だつて獣のように速い。一方、吾妻の猟師も自信に満ちていた。「よし、明日は俺が獲らせてやる！」と大声で言う。明日は、とっておきの猟場に案内してくれる……ということでお宴はお開きになった。(つづく)

狩猟界社・出版案内

好評発売中!

実践 柴犬とヤマドリ猟

青木 豊・著 四六判 186頁 定価1890円(消費税込)〒290円

狩猟は、一に犬、二に足、三に鉄砲と、父親から教えられた“赤城の狩人”がその教えを守り、柴犬を使ったヤマドリ猟の成果を書き下す。



著者の父でもあり、狩猟の師匠

- 1章 はじめに「犬」ありき
- 2章 足、ヤマドリに出会うために
- 3章 鉄砲、その上達のために
- 4章 狩猟を始めようと思う人へ

柴犬の猟性、しつけ、訓練から、ヤマドリの生態と習性、射撃の上達法、これから狩猟を始める人への適切なアドバイスがやさしく解説されています。

■ご注文は、郵便振替にてお申し込みください。

口座番号 00130-0-70665(送料共2180円)

発行 (株)狩猟界社

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-21
 電話 03-3292-1211・FAX 03-5282-5250